

## いのちを繋ぐ 言葉で繋ぐ

～あの世とこの世を繋ぐ「亡き人への手紙」#1～

里 みちい (さと・みちい)

### 「繋ぐ」

皆さん、こんにちば。きょうは「味わう」というところにじっくり立っていただきたいと思います。

あちこちで講演をすると、皆さん一生懸命、私の言うことを聞いて書いて終わってしまうようです。書くことは大事ですが、書いている時は頭が動いているので、心の耳は半分ぐらいしか動かなくなりま  
す。きょうは「心の耳」で聞いていただきたいと思います。聴くことにちょっと重心を置いて、ぽわーん  
と気を外して聞いていただくといいいかな、と思います。

今日は、「詩がたり」という初めての世界を皆さんに体験していただきます。現代は言葉が記号になっ  
てしまって、「頭では知っている」けどいざ自分が言葉を使いこなしたり、共感したりする力がものすご  
く弱くなっています。

人と人がほんとにしつかりつながる「座」はなかなかできなくなりました。皆さんと一緒に語りを聞く。皆さんと語る。私が手をつないで心をつないで、この場所を「座」にしたい。そして皆さんに素敵な驚きをいつぱい持つて帰っていただきたいと思つて、きょうはいろんな作品を持ち込みました。皆さんにはぜひ、「感じる」という世界を始めてほしいと思つてこの服を着てきました。

この黒い服も実はごみ場で拾ったものなんです。手縫いでこちよこちよとやっているうちに出来上がつて、上着としたものです。ある時、人とおしゃべりをして、うっかりお洋服の右の袖に左の腕を入れてしまいました。そのとき、こんなふうにひっくりかえして逆の着方があると気がつきました。

いかがでしょう。今から語るのにどちらを着るのがいいですか皆さん！

（受講者にたずねた結果）ほとんどの皆さんは、この裏返しのほうが何か素敵と感じて手をあげていただきましたね。

### （朗読）「出会いのレシピ」

おいしい出会いをつくるのに  
こんなレシピはいかがです  
みずみずしい心を鍋に目分量  
ひとが好きをひとにぎり  
やさしい野菜を一束入れて  
にくい思いは入れません

砂糖はころあいひとつまみ  
塩はしおどきかくし味  
ユーモア・ウィットふりかけて  
寛容たつぷり入れましよう  
熱くなったら火を弱め  
コトコト煮えるその音を  
聴く耳木苜しづかに入れて  
水をさしてはいけません  
こうしてできる出会いの「ごちそう」  
あくしゅするたびうまくなる

言葉遊びがいつばい入っていたのがわかりましたか？　こんなふうにすでに知っている言葉を日々の暮らしの中で、人生の中で、全部生かしていくことができます。

皆さんの右に見ていただいている作品は、一つが十一センチ四方の布（一枚一枚に漢字が書いてあり、全部で千文字）を集め縫い合わせたものです。異なる千の漢字で人間の生き方が詩になっています。「千文字」といいます。子供たちへの授業に使うように作りました。

母の死に目に会えず、「お母さん、ごめんなさい」という思いで母の名前「千代枝」を生かして千字文を作ったんです。全部手縫いです。日本全国、八歳から九十歳まで百人余の方が漢字を書いて手伝ってくださって、千字文は出来上がりました。

中国で生まれた漢字が韓国に行つて、百濟から王仁博士<sup>わに</sup>という人がこの千字文を持ってきてくれて、日本は文字というものを持ちました。漢字のことを「真名<sup>まな</sup>」と言います。漢字からひらがなとカタカナが生まれました。全部、子供たちへの授業に使えるように作つたのです。

（会場前方が全面の窓である。「母への手紙」「父への手紙」が横へ長く貼られ、その下に関連する別の詩が一つ一つ短冊のようにぶらさがっている。）皆さんに見ていただいているのは、亡くなった父に、そして亡くなった母に書いた手紙です。一九九九年に「父への手紙」を書きました。「母への手紙Ⅱ」は二〇〇六年の「母への手紙Ⅰ」に続いて去年（二〇一四年）、母が生きていたら九十九歳だなど思つて書いて、ナガサキピースミュージアムで半月ほど個展をやる時に発表したものです。

「父への手紙」に比べて「母への手紙」はすごく大きくなって、詩が二十三本くつついています。「父への手紙」には九本しかぶら下がっていない。かわいそうですね。

さて、「父への手紙」が聞きたい人？「母への手紙」が聞きたい人？全国どこに行つても、必ず「母への手紙」が聞きたいといわれるのです。では、来月五月十六日（第二回）に「父への手紙」を聞いていただくことにします。

まだ、皆さん緊張してらっしゃるので、この詩を聞いていただきます。

（朗読）「あなたに会つと花になる」

かぜひきそつな今日の日も

あなたに会うと花になる  
おしゃべりの吾がクチナシ  
耳が菊

こころはフリージャ

目は薔薇に

鼻は菜の花 つんつん椿

唇よせて チューリップ

この身宇宙にコスモスに

花がいつぱい咲きました

毎一会のタチバナし

ありがとう あなたに詩を贈り

両手あわせておじぎ草

さあ、お花の名前がいくつ入ってましたか。聞いてなかった？ 数えてなかった？ お花の名前を数えてください。「花」はだめですよ。「花の名前」だけ数えてください。私は十一入れて作ったつもりです。神戸のホテルオークラで、とっても大きな教科書会社の東京書籍さんに呼ばれてこのお花の詩を語りました。オークラも花が咲きます。

（朗読）「あなたに会つと」（ホテルオークラ版）

ホテルオークラで

あなたに会うと花になる  
おしゃべりの吾がクチナシ  
耳が菊

こころはフリージャ

目は薔薇に

鼻は菜の花 つんつん椿

唇よせて チューリップ

この身宇宙にコスモスに

花がいつぱい咲きました

毎一会のタチバナし

ありがとう あなたに詩を贈り

両手あわせておじぎ草

書籍会社の方が「里さん、『ありがとう あなたに詩を贈り』のなかに「クリ」も入ってるじゃないですか。クリも花が咲きますよ」と。「え？ 私見つけてほしくなかった」と思わず笑って言っちゃったんです。

こんなふうにくらでも言葉の中にユーモアやウィットを入れ込むことができます。「あー、言葉があるおかげで生きてるって、いろいろ悲しいこと、嫌なこといっぱいあるけど、「うふっ」て笑えるね。一緒に笑えるね」。

この「父への手紙」と「母への手紙」の間、二十二本目に「学くんへの手紙」という作品を書いています。滋賀県の青柳小学校へ六年生の授業に行った時、授業を終えて校長室にいた私のところに、その授業を

受けた男の子が先生に連れられてやってきます。先生が「里さん。『僕が伝えとくよ』と言ったのに、どうしてもこの子が『直接、里さんに僕の声でお礼が言いたかったから連れてつてくれ』と言うので、ご一緒しました。いいですか？中に入れていただいて」と。「どうぞ、どうぞ」と私。

校長室に入ってきた男の子は、短い言葉で「今日まで僕は言葉や文字を憶えるものだと思っていましたが、言葉や文字がこんなに人を楽ませて、元気づけることを知りました。ありがとうございました」ととても美しいお辞儀を残して帰ってくれました。

この子はその日、おうちに帰って手紙を書きます。あくる朝、学校の担任の先生に「この手紙を里さんに送ってほしい」と言います。先生からその手紙が届きます。電話もかかって、「里さん、実はあの手紙を送った男の子はいじめっ子のリーダーでした。申し訳ないけれど、あの子が感動した『希望』の詩はがきでぜひお返事を書いてくれませんか」ということでした。もちろん、大喜びでお返事を書きました。

そして、「鉄は熱いうちに打とう」と作品をつくることを提案しました。納豆のふたでできた六メートル×三メートルの大きな作品です。東京の国連大学の青山通りに面した玄関に飾りました。「裏」という漢字と「表」という漢字が合体しているのが見えますか。「表裏一体」という作品で、「裏」の字は「衣（ころも）」の中に「里」が入っていますね。「土」と「里」で「埋める」になります。「表」は「衣」の中に「土」がありますね。

いじめっ子の元リーダーに急遽リーダーになってもらって、納豆のふたの作品をすぐに作ってもらった。百二十五枚で作ったのです。

いじめっ子といじめられっ子はもう境界線を越えて、皆で「一つの意味ある目的」のために納豆のふたの作品を作って、「国連大学で僕たちの作品が飾られる。国連大学って日本にあるんだ」。そういうところから社会の勉強をしていきました。

いじめっ子の元リーダーが毎年私の夏の神戸の個展に来てくれるんですが、「里さん、僕はもう学ぶ喜びを手にしたから、学校の先生になることを決めました。大学の教育学部に行って先生になる」と。いつか、いじめっ子の元リーダーの体験をしつかり生かしてくれたらいいなと思っています。

そして、その小学校の子供たちは私の授業に来た十月から五カ月後の三月に、皆で握手をして卒業していきました。「学ぶ喜び」って、今なかなか皆が手にしない。それはもったいないと思います。

今からこの「母への手紙」を皆さんに聞いていただきます。ぜひ力を抜いて、心△Heart▽のまん中の耳△ear▽を集中させて味わってほしいと思います。あちこちに桜の花びらを九十九枚、母の供養に貼りこみました。（「母への手紙」の各所に説明や他の詩を入れて、詩がたりは進む。）

#### （朗読）「母への手紙」

お母さん、あの世に桜は咲きますか？

おわかれしてから八年。生きていたら今年「白寿」ですね。

「来年も」と言いながら果たせなかった桜の季節がまた巡ってきました。



桜を見に連れて行ってほしいと母が言ったのです。そのたびに私は母に「じゃ、また来年桜を見に行こうね。必ず行こうね」と約束したのに「次また行こうね」ともう約束できない。約束を果たせなかったのです。

この季節になると、あの日の桜が鮮やかに甦ります。いつもとは全く違って見えた川沿いの桜並木。

その光景は私の人生を変える背景となりました。

二十数年前のその日は青空。

春爛漫の空気が一面に広がっていました。

膝のケガから歩けなくなっていた右脚の手術を終え、

ギプスの足を引きずりながら退院するときでした。

車の窓から見えた花吹雪の輝きが、この世のものとは思えなかったのです。

私たちはぎりぎりの極限のところに追い込まれると、違って見える視点を持つようになります。阪神・淡路大震災を体験する前と体験した後の桜、違ってみえませんでしたか？本当にこの時、たまたま通った大阪の淀川沿いの桜が、この世のものとは思えませんでした。「こんなに美しくみえるのは、生きていればこそではないか。それならば、生きて味わう悲しみも引き受けなきゃいけないんだな」と、なぜかその時思ったのです。

何て美しいだろう。こんな美しいものが見られるのも生きていればこそではないか。ならば生きて味わう悲しみも引き受けよう

そんな感慨に耽ったのは「手術の成功率は五分五分」と言われ、失敗のことも考えていたからかもしれません。

入院するとき、私は一冊の本を求めました。歌人・上田三四二みよじの四二歳の時の闘病記です。

上田三四二は名前しか知らなかったのです。

手術は偶然、私の四三歳の誕生日。

四二から四三歳になるときだったので、「三四二」という数字の名前にも験を担いだのです。それを読み進むうち、こんな言葉を見つけました。

「病気が私に与えてくれた恩寵」。「教訓」でなく「恩寵」。

その言葉が光の矢となって入ってきました。

とすれば、いま私が感じている「痛み」も「悲しみ」も「恵みの種」。

そう思うと、心が高揚していくのがわかりました。

それまでの私は「喜びだけ、美しいものだけ」と、

ひ弱な自分に好都合な「表」半分の世界を無意識に追っかけていたようです。

しかし、その「裏」にこそ真に美しいものが隠されているのではないかと気づきました。

気づき始めたというほうが多分正しいと思います。

そうして自「」との対話が始まったのです。

「そこそこ恵まれたこのままの人生でいいか？」

「いや、何か足りない……」

そんな自問を繰り返すうちに、四四歳を迎えました。

米寿の半分、「半米寿」です。ちょうど、その頃、父が京都の病院に入院しました。

その病院の近くには花園大学があり、そこに社会人向けの入試枠があることを知りました。

「そうだ！ 半米寿のお祝いに自分を大学に行かせてやろう。」

父のお見舞いにも毎日行けるし、一石二鳥と嬉しくなりました。

仕事を辞め、針を「0」に戻し、四五歳の大学生活が始まったのです。

定期券の学生割引は私が大学に通っている時、なんと八割引きだった。毎日通うと二万円掛かるところが四千円だったんです。私立の大学なので、もちろん大学の学費のほうがずっと高くはつくんですが、これは大きなきつかけになりました。

「大きくなったら何になりたい？」と訊かれるたびに、私は「花咲かばあさんになりたい」と本気で答えていました。もうちよつと大きくなって言葉遊びが出来るようになると、「アルコールなし、店舗なしの花酒場のママさんをする！」と面白がつて言っていました。

「バー花酒場バー花酒場バー花酒場」と言い続けると、「花咲かババア」に聞こえましたか。花園大学なんて、名前もいいじゃないかと思つて私は行つたのです。もし、父が他の病院に入つていたら、この大学に行つたかどうかかわからない。そして大学に行つたかどうかかわからなかった。「花園大学に行つてます」と言うと、多くの方にラグビー場ですかとよく言われました。

大学に入り、文字の奥の「知の光」に目を見張りました。

しかし、文字だけでなく、数字にも深遠なことが埋め込まれていたのです。

教育テレビで放送している『一〇〇分de名著』は今、

『ブッダ最期の言葉』をやっています（二〇一五年四月一・八・十五・二十二日放送）。

出てらっしゃるのは佐々木閑さんとい花園大学の先生です。

私もかつてこの人は多分いい先生だなと思った。

ほんとにしつかり、とても分かりやすいお話をしてらっしゃる。

母の訃報が届く前日のことです。

小学三年生の教科書で、算数の定理を見ているとき、不思議な時間が訪れました

私は五十八歳でランドセルを背負ってジャンパースカートをはいておさげ髪をして小学校にも入りました。一カ月に一週間、毎月、奥出雲の小学校に通いました。五十八歳の小学生が生まれて、『朝日新聞』の社会面にも大きく取り上げられて、朝日新聞社にいったい問い合わせが入ります。小学校に入るのにはどうしたらいいか。もちろんそんな制度はなくて、どうやら私一人だけです。

二〇〇五年の五月十八日でした。小学校三年生の算数の時間に教科書で算数の定理を見たのです。「ゼロにどんな数を掛けても答えはゼロです。どんな数にゼロを掛けても答えはゼロです。」すると、

四つの「0」が「無」になり、私に語りかけてきたのです。

「無から生まれた自分が

無力のまま無心に「いま・ここ」を生きるとき  
希望の点が線になり帯になり  
無限に広がってゆく」  
まるで母の遺言のようでした。

「ねえねえ、お母さん、これ見たとたん、ゼロの四つの穴が皆、私に語りかけてきたんだよ」と手紙を書いたのです。この四つのゼロから母の遺言みたいなのが聞こえてきたのが私にとってはとても不思議で、なんでこんなことがあるのだろうと思った。大阪が生んだ三好達治という詩人がいますが、詩人にはやっぱりよくあることだと本で見つけて、ちょっと安心しました。

家族も誰も側に居ないとき、一人で、眠るように静かに逝ってしまったお母さん、ごめんなさい。最期に何か言いたかったのですね。

この世から消えて「無」になるときに、「究極の言葉」を贈ってくれてありがとう。

私も…お母さんの年齢に近づきつつあります。

残された日々を思い切り生きてゆきますね。

その物語は、私が側に行ったときお話しすることにしましょう。  
ゆっくり待って下さいね。

お母さん、「もいちど、ありがとつ。」

二〇一四年三月二〇日～四月二三日  
ナガサキピースミュージアムにて

里みちこ

西宮の瓦木中学校かわらぎのPTA講演を頼まれた三月のことです。その時に「父への手紙」で詩がたりをやりました。終わって、一番後ろに座っている女の人が手をあげられた。「座ったままでいいですよ」と言いました。ずっと泣きながら、早くしゃべらなくっちゃいけないと思っしてしゃくりあげるので、「ゆっくり待つてゐるから大丈夫。泣くってこともそれはそれなりにあなたの表現。ゆっくり待つてゐるから大丈夫です」と私。

その人が一泣きしたあと、「私はきょう来たくなかった。私は理系の人間で、詩だとか言葉なんてとても苦手な人間で来たくなかった。だけど、PTAの役員だから仕方なしに来ました。それなのにこんなに泣けてくるのはなぜですか」という質問でした。「えー、困っちゃったね。泣いてるのはだってあなただもん。宿題にさせてください」と答えました。

私は二〇年前から、大阪城公園で毎朝、詩を語り始めました。人間がどんな時にもどんな所にいる時も、大事なものは希望の心を持つこと。希望の方向を向いて待つこと。希望の力から出発して詩を読み始めたのです。

そこに十八年間通った寿司屋のおじさんが五カ月後の夏、詩がたりを聞いてて横にぶら下げたタオルでわあーと男泣きし始めた。「わし、うれしいわけでもない。もちろん悲しいわけでもない。なんでこんなに泣けるんや」と言われました。「あー、瓦木中学校で泣きながらの質問はこれだったんだな」と私が思って詩を書いたのです。

〔朗読〕「涙」

この涙はどこからやってくるんだらう

うれしいときやかなしいときより

もつと奥からやつてくる

透きとおった静かな涙

そう…

水に戻ると書く涙

水から生まれたわたしたちが

自らをとりもどす涙

ずつつと忘れていた泉

わたしの心の底のそこ

そこからやつてくる涙

小学校生活で文字や言葉を一生懸命頭の中で覚えてしまうと、味わう喜び、感じる素敵さ、そういうものから離れてしまう。私もそうだったな。何かをすること、しちゃいけないこと、しないこと。そのことを私がやつと気がついたのは、五十八歳の二度目の小学校生活です。生きる喜びを、生きがいを、人と人となぐ言葉の世界でやつていこうと改めて思つて、ずっと続けることになりました。

「お母さんへの手紙」の下に、二十三の詩が飾つてある。全部ご紹介できるかわかりませんが、順にご紹介していきます。

(朗読)「わかれてそして」

苦みののこる拙い別れをしたのです

みれんののこる淋しい別れをしたのです

痛みののこる辛い別れをしたのです

そうして ある日

突然に予期せぬ訣れがありました

取り戻せない不意の訣れがありました

諦めきれない永遠の訣れがありました

いつか みんな ある日 ある時 わかれの日

わかれてそして そこから始まる物語

わかれてそして

わかれてそして

この詩一つだけでも皆さんにお話したいことは三十分から一時間くらいかかるのですが、ここにこだわっているとなかなか前に進めません。

全国で一年間に自殺者が約三万人あると言われて、たまたま私が詩人になったことでたくさん出会っています。自分の夫を自殺で失う。やっと立ち上がったと思うと、また子供。家族二人を自殺で亡くした人達はもうなかなか立ち上がれません。

そういう人達に何か役に立つ詩が生まれたらいいな。誰にとつても必ず別れは来る。そこから立ち上



がつて始まる物語という「わかれてそして」を書きました。この詩は去年、放送大学で使われました。ちょうど今八重桜が咲いていますね。

(朗読)「愛桜詩」

春の酸素はさくら色  
深呼吸したわたくしの  
ほつぺにひとひら花びらひらり  
桜の切り込みどなたが入れた  
桜前線 一歩二歩散歩  
着せてあげよか花衣  
一重と八重のうすぎぬを  
旅のおわりは北の果て  
砂に抱かれて櫻貝

校長先生から頼まれてだけでなく、私もぜひこの小学校生活の体験を活かしたいと思っていました。朝起きると、口からこぼれるようにこの子供たちに役立つ詩が生まれたのです。小学校に入る直前、四月六日でした。

(朗読)「空を見てごらん」

あいうえ　　おーい

かきくけ　　子どもたちよ

さしすせ　　空を見てごらん

たちつて　　とびつぎりの青空を

なにぬね　　野原に立って

はひふへ　　ほうらがわいてくる

まみむめ　　もりもりわいてくる

やいゆえ　　夜空も見てごらん

らりるれ　　□マンに満ちた星空を

わいうえ　　をいを泣けるまで

各行の始めに、「あかさたな　はまやらわ」を入れ込んだら、全部できちゃったんです。ほんとに天からの贈り物のように生まれた。子供たちが小学校に入って生きる力を入れるためのメッセージができて、もう大喜びしました。

三・二一のちよつと前に私は会津若松に詩がたりに行きました。「夢見亭」というとっても大きな美味しい蕎麦屋さんがある。作家の村松友視さんが名前を付けられ、全国の蕎麦好きが新蕎麦の採れた時に集まってきます。私は新蕎麦のお料理コンテストの審査委員長もやらされました。蕎麦なんて全然分らないんですが。

「里さん、新蕎麦のお料理食べて即興で詩ができませんか。『あなたに会って花になる』って即興で書いた詩でしょう。蕎麦もやってください。」

「えー。あ、『蕎麦を食べてごらん』が今できました。」

(朗読)「蕎麦を食べてごらん」

(受講者) あいうえ (里) おーい

(受講者) かきくけ (里) ここに集う皆さんよ

(受講者) さしすせ (里) 蕎麦を食べてごらん

(受講者) たちつて (里) とびっきりの新蕎麦を

(受講者) なにぬね (里) のどこし違うから

(受講者) はひふへ (里) ほうら、やっぱり違うでしょ

(受講者) まみむめ (里) 盛を食べてごらん

(受講者) やいゆえ (里) よって食べてごらん

(受講者) らりるれ (里) 論より証拠

(受講者) わいうえ (里) をいをい泣けるまでたっぷりわさびを効かせてご一緒

もちろん、最後には「実は『空を見てごらん』という子供たち向けの詩があったおかげで、これを即興

だ和大嘘ついて今皆さんに喜んでいただいたんですが」とお話ししました。

去年の秋、私は群馬県の富弘美術館に招かれて行きました。その時に星野富弘さんの詩で「ああ、悲しみや苦しみをほじくつていると、向こうに希望が見える」というのがありますよと教えていただいて、「やあ、素敵な言葉だな」と思つて帰つてきました。

私たちが知つてゐる五十音は言葉として、日々の暮らしの中で生きる楽しさやうれしさだけではなく、悲しみや苦しみの究極に追い込まれた時、力になるんです。病気や事件や事故に出会つた時、そこから見えてくる恩恵があることに上田三四二さんの本で気がつきました。

### （朗読）「創<sup>きず</sup>から」

傷つくことから 氣つく

氣つくことから 築いてゆける

築く過程で 絆ができる

創の裂けめから 新しい我が生まれて

命がだんだん 立つてゆく

「創」のつくりは「リ<sup>りつと</sup>」と言つて刀を表す漢字です。自分の心が傷つく時、体が傷つくと思つてゐる時は、大体「いやだあ」と愚痴つて怒つてぶつと切つて終わつてしまふ。「創」は「つくる」とも「はじまる」とも「きず」とも読みます。自分の命の出発として初めとして立ち上げていく。何か素敵なことの始まり

でもある。「いやあ、これは素敵な漢字だ」と思って詩を書きました。音の遊びで詩を書いたんですよ。

雑誌『ミセス』の取材を受けた時に、「里さんは死んでも、この詩だけは絶対残りますね」と言っていたので私も喜びました。

大阪城公園で雨の日も風の日もお正月も詩がたりを続けていると、全国からいらっしやるようになりました。「長野県から行くんですが、里さんはその日いますよね」と確認が入ったりしてくる。私も家族がいるし、私の年齢を考えてもだんだんしんどくなってきた、今年は阪神淡路大震災のその日一月十七日の午後から一週間の出張が入ったので、閉じたんです。（でも、またリクエストがあり再開しました。）大阪城には私の樹と決めたとってもみすばらしい小さな樹があります。その樹に向かって詩を読んでいます。

（朗読）「美しいものがあれば」

もうクヨクヨするのはやめることにします

もうアクセクするのはやめることにします

大空に両手をあげる 櫛の樹々と

その樹に射し込む 木漏れ陽と

その陽に映える 黒い瞳と白い歯と

もうそれだけで 充分しあわせなのだから

小さい頃から、「どうして皆はこんなことで傷つかないんだろう。どうして私はこんなに傷つきやすいんだろう。」そんな私を支えてくれたのは詩なのでした。

ラビンドラナート・タゴールというのはインドの詩人で、一九一三年にアジアで最初にノーベル文学賞を受賞しました。「果実採集<sup>かじつとり</sup>」という詩があります。私は落ち込みやすいので、その詩を自分に言い聞かせては元気づけています。私は、小さくあかんだれでもいいから、自分の命の実をつけてほしいと思って、詩はがきでは「里みちこ」の「み」を赤くしてあります。

#### （朗読）「果実採集」

危険から身を守られることを祈るのではなく

恐れることなく危険に立ち向かうような そんな人間になれますように

痛みが鎮まることを祈るのではなく

痛みに打ち克つ心を乞うような そんな人間になれますように

人生という戦場における慰めてくれる友を求めるのではなく

ひたすら自分の力を求めるような そんな人間になれますように

恐怖におののきながら救われることばかり望むのではなく

ただ自由を勝ち取るための忍耐を望むような そんな人間になれますように

成功のなかにのみ人間の慈愛を感じるような そんな卑怯者ではなく

自分が失敗したときにこそ

宇宙の手に握られていることを感じるような そんな人間になれますように

今月十四日にタゴール暎子さんという人と私はお会いしました。タゴール暎子さんは、タゴール家にお嫁に行った日本人の方です。「インドのカースト制度のなかに生まれた、貴族のタゴールさんはどうしてあんなにいつぱい詩が書けたんですか」と、お目にかかって私はどうしても聞きたかったのですね。もちろん榮譽やいろんな面で恵まれても、それなりに苦しみ、悲しみがあつて、あれだけ深い詩が書けるようになったと教えていただきました。

私たちが生きていると他人ひとの声、自分の声を聞く。心の声もしつかり聞いていく。それが生きがいにつながる。生きる深さに、濃さに、生きているのを味わうことにつながると思つて書きました。

(朗読)「生きる音」

あー という感動

いー という後悔

うー という呻き

えー という驚き

おー という感嘆

そして「ん」という沈黙

母音は 生きるわたしの叫び

本音は 生きるわたしの羅針

ここまで来ましたね（と詩を指さして）。今の若い人たちが失敗を恐れているのでぜひ使いたいと西宮の教育委員会から連絡があったものです。

（朗読）「わたしのいのち」

わたしのいのちの色あいを知るために

わたしのいのちのありようを識るために

そして

そのいのちを

高らかに謳う日のために

失敗を恐れずに生きてみます

わたしだけのいのちの重みを信じて

次は私の詩のなかで一番長い詩をご紹介します。漢字の生まれた中国でこの詩が広がっていつているのを聞いて、本人の私はとっても喜んでいきます。

（朗読）「やさしくなれたら」

やさしいということばをしらなくても

やさしくなれたらうれしいな

やさしいとかんじがかけなくても



やさしくできたらうれしいな

そして

やさしいとかんじが

人を憂うとかくことをして

優しくできたらよろこびだ

知ることは優しくなることなのだから

優しくなることは よろこびなのだから

それから

人のいのちのはかなさと

己の力の小ささと

ひとの世のかなしみを知るにつれて

なんにもしない見えない優しさを知ってゆく

知ることは優しくなることなのだから

優しくなることは かなしむことなのだから

そうして

なんにもできない かなしみと

なんともいえない せつなさに

心に涙がしみてゆき

慈しみの優しい眼ざしを知ってゆく

知ることとは優しくなることなのだから

優しくなることは 慈しむことなのだから

知ることとは「よろこび」「かなしみ」「慈しみ」と言ったのですが、「かなしみ」という漢字はいくつ書けますか。一つは書けますね。二つは書けますか。家に帰って久しぶりに埃を払って重たい『広辞苑』を開いてみてください。

『広辞苑』を作った人は新村出しんむら いずるという人です。一九五六年に文化勲章を貰っています。新村出さんのお父さんは、「まさかうちに生まれたばかりの子供が『広辞苑』を作って文化勲章をもらう」とは思いもしませんでしたでしょう。でも、とっても素敵なユーモアでこの息子に名前を付けられたんです。

お父さんは山形県令、今という山形県知事です。山形でお母さんのお腹に入って……（笑っている人がいるから分かったんだね）、山口県で生まれた。そのユーモアで名前を付けられた新村出さんが作った『広辞苑』に、かなしみの三つ目の漢字はちゃんと載っているの、今日見てくださいね。

無駄な動きをしなくなったことで、大事なことがどんどん抜け落ちてきています。知ること、単に頭へ入れて知ることとは違って、こんなふうにならと驚くと豊かで楽しくなりません。ここで私から「かなしい」という漢字の三つ目を教えてもらうより、ずっと深いところに入る。漢字の深いところを自分なりに感じ取っていただくと、もう一度学習できますね。よろしく願います。

「滋」は水がますますどんどん湧いていくという意味。「滋賀」とは琵琶湖を「賀」する、お祝いする。

地名はこんなに素敵にできています。琵琶湖の水は蒸発してまた雲になって雨として降ってきますね。延々循環を繰り返します。

里みちこ流には、どんな水タンクがいつぱいになる。慈しみの心を持てた時、とても嬉しいですね。「よいことだからする」という時は疲れます。必ずどこかで息切れがしてきます。

言葉に関わる私の活動の出発は阪神淡路大震災でした。西宮の体育館に毎日毎日ボランティアで通い続けました。惨状のなかでまったく名前の知らない人と一緒に泣くしかないような状況がいつぱい起きたんです。

あるおばあちゃんが、「自分はこうして生きて、家族も誰も死んでいない。家を建て直すのに困っている人がいっぱい。でも自分は家を建て直すのに心配する必要がない。ひとつひとつ悩みの種をチェックしていくと、何も悩む必要がないと自分に言い聞かせるのに、自分の心がざわついて眠れない。なぜなのか」。こういう質問されてしまったのです。

私、右の耳が聞こえないんですが、おばあちゃんは右に来た。ほんとは左に来ていただきたいけれどもいいやと思つて質問を考えても、言葉が出ない。一番大事なものは言葉になりにくい。

でもその思いはわかるんだね。そのおばあちゃんが眠れない。眠れるようになったらいいな。しんどいんだな、大変だな。

あるとき、お弁当を持っていたんです、お弁当配りのボランティアをしてたから。おばあちゃんは首を横に振った。「いらないのね。毎日、こんな冷たいお弁当は欲しくないね?」と言うと首をたてに振

る。気がついたら、私はしゃがんで言葉がないまま、その方の背中をずーと撫でてたの。私が泣けてきた。それを見てその方も泣けて、お弁当を前ににつこり二人で笑い合いました。

人間ってこんなにつながるができる。きょうのテーマですね。

人間にとって一番必要なもの、それはなんなのか。こんなことをしっかり考え、一番いい学びになったのは、阪神淡路大震災のボランティアでした。大学に戻って、そう感じたことをきちんと組み立てていくことができれば、多分私は皆さんの前に立つてこうして詩がたりをすることはなかったと思います。

人と人は、名前も知らず、年齢も超えて、立場を超えて一瞬、こんなに素敵につながるができる。これこそが人間にとって不安や恐れや死やそういうものから解放される時だと感じたのです。「父への手紙」の中にある「たまゆらの命と命の響きあい」です。

阪神淡路大震災で、一瞬に六百人近い子供たちが孤児になったのです。「片親や、両親を亡くした子供たちのために『希望の家』を建ててあげたい。」と藤本義一さんの呼びかけが一九九七年の一月十八日に『朝日新聞』の朝刊に載りました（『阪神大震災遺児らの心のケアに 芦屋市に『希望の家』が仮オープン』）。それを見た瞬間、私の父も片親で育ったので、この子供たちのために役立つことをしたら、あの世に行ったお父さんがどんなに喜ぶだろうと思ったのです。父の何よりの供養になると思って立ち上がった。

見ていただきたいものはいっぱいあります。きょう皆さんに見ていただいている通り、全部捨てるも

ので作品を作ったのです。アイスキャンディの棒に詩を書いて、子供たちを驚かせて、ぼくたちの授業にどんな人が来るんだろうと想像力もちゃんとつけて、授業に行くようにと考えついたのです。死に目に会えなかった残念という思いを、何か花を咲かせたいとの思いからです。

私たちは年齢順に死んでいきません。寿命というものの前に私たちはただただひたすら「はい」と言つて死の日を迎えなければいけない。これは佐々木閑さんの言葉です。

花園大学社会福祉学部に入ったのですが、たまに文学部仏教学科にもぐりこんでいました。そのときに学長の話がありました。

「傷つくときは虚飾の衣が破れるとき」。私立の大学に行こうと思つたら五百万のお金は用意しなくちゃいけなかったのですが、この言葉はそれに値したと思います。虚飾の衣が破れるとき、多くの人は傷ついて悲しんでるだけになってしまいます。

大阪城にいらした方から、「もうそんな嫌なことは早く忘れなさいって人にも言つたし自分にも思つていた。それでは生きる喜びが手にできない。里さんに会つてわかりました。里さん、ありがとうございます」と言われました。それは私にとつてとてもありがたい言葉でした。

大手前大学さくら夙川キャンパスのなかにお茶室があるんだそうです。千利休、これはすごくいい号です。利を休むんですよ。だから刀を置いて、勝ち負けの世界じゃない茶室に入る。商売人も儲かるか儲からないかという利を休む。

利休饅頭を買いに行くと、利益が永久にありますよと謳っています。

実は私は呉服屋の娘なのです。私の亡くなった母は、「呉服屋の娘で育てたのに、ごみの服を拾ってく  
るのはやめてくれ、そんな恥ずかしいこと」と言っていました。

捨ててある布を拾ってええとこ取りして縫ってあるのがお坊さんの袈裟です。今度からお坊さんを見  
るときも、袈裟がどうしてこんなパッチワークになっているのかわかって見ると、袈裟の精神がどこか  
ら来て汚いもののなかからできたか、悲しみから喜びにと両方の世界にすごい物語のなかに光る宝が隠  
されてることに気がついていく。だから仏陀の糞掃衣ふんぞうえという袈裟の精神です。

このあたりを手にしてお茶を習ったほうがいいと思います。

「知ってるよ」じゃなくて、「ああ、生きるってなんて素敵なの」。全国の子供たちのところにも小学校  
から大学まで授業に行きながら、先生方の研修もしながら、自分と関わる人達とつないでいけると私は  
考えています。

去年、私の母が生きていれば九十九歳の一月四日に私は「母への手紙」を書いたのです。夫婦の間や子  
供との死に別れだけじゃなくて、「ごめんなさい」や「ありがとう」の言えないまま別れた誰かに対して  
も、全部自分のなかで丁寧生きていくことができます。意味ある素敵な美しい花を咲かすことに文字  
や言葉を生かしていく。もつと大事な「沈黙」も入ってきます。それを手にして素敵な人生を重ねていた  
だくと嬉しく思います。

五月十六日までにもし皆さんのなかで、お父さんでもお母さんでも子供でも昔別れた恋人でも、宛て  
て手紙を書いて来ていただけたら嬉しいのです。皆さんの前で発表していただけたらすごく嬉しいのです。

挑戦してみてください。

文字や言葉は自分の命を生かしていきます。命の生きていく自分と自分自身がつながるためには言葉をしっかりと立てて生かしていくてください。

亡くなった父と別れる時に「ありがとうとごめんなさい」という詩を書きました。NHKで使われた日に初めて父が夢枕に立ってくれました。きつととっても喜んでくれます。

(朗読)「ありがとうとごめんなさい」

目でいえる

口でいえる

手でいえる

合掌でいえる

体でいえる

心でいえる

ふたつの言葉

ありがとうとごめんなさい

どちらかひとつを選ぶとしたら

それはやっぱり ありがとう

最期の言葉

ありがとう

……ごさいました。これできょうは終わりです。